

昔むかし、ある奇妙な惑星に、肌の黒い少女がいた。名はバヤングメ。一七五〇年ごろ、穏やかに入り組んだデルタ地帯に姿を現した。大河の澄んだ水、大海の緑の水、そして末無し川の黒く濁った水が混ざり合うこの土地では、いまだ靈魂は不滅であると思われていた。

しかしここに住む者たちは、オリンポス山〔ギリシア神話においてオリンポス十二神が住むとされる山〕も、ヴァルハラ〔北歐神話におけるオーディン神の殿堂〕も、天のエルサレム〔キリスト教徒が最終的に安住の地と信じてはいたなかった。漠とした考えにふけることを嫌う一方、飼っている牛や、塩気のある牧草地、そしてとりわけ稲田にあふれんばかりの愛情をそそいだ。この土地の稲田は西アフリカ中で評判になっていた。葬儀から三日を経た死者たちはただ、祖先たちの国へとつづく道をたどった。皆、それが村の地下に、地表から一メートルほどの深さにあることを知っていた。生者は死者に贈り物をし、いけにえで養った。死者にヤシ酒を捧げる目的で、

祭壇や空き地、疎林の地面には小さな注ぎ口が掘られていた。お返しに死者たちは耕作の手助けをしようと、笛でも吹くように作物の根に息を吹きかけた。すると米には神秘の音楽が宿り、豊作となった。死者は地下で一、二世代に相当する時間を過ごしたが、その時間は、生きることの疲れ、孤独感、あるいは倦怠の程度によって異なった。やがて木の根を伝って地上に戻ると通行人を待ち伏せて、その人物にこっそり潜り込んだ。すると死者は子ども、トカゲになり、不都合がなければ数カ月後に天上の世界に居場所を見つけた。つまりこの土地の人々にとって死はひとつの生であり、生はよみがえりであった。彼らは自分たちが、牛や、塩気のある心地よい牧草地や、すばらしい稲田の永遠の所有者であると信じて疑わなかった。バヤングメが生まれた時、腹部のまだ乳白色の肌には、苺が、いやむしろ木苺がついていた。それを見た婆さまたは心得た様子で目を細め、頭を軽く揺すった。そして、この子と運命をともしする木を植えるため、男たちが胎盤を地中に横たえた時、老婆たちは赤子の名をポングウエにしようと取り決めた。明らかに、亡き母方の祖母ポングウエの生まれ変わりであったから。それに子どもの睫毛は長く、^{まつげ}瞼に横たわるほど細かったため、^{まぶた}気まぐれにバヤングメという名も与えられた。ディオラの民の言葉で、透き通る睫毛の女という意味である。

とても幼いころから、少女は祖母ポングウエのことを夢見ていた。この祖母はもつと昔の祖母の生まれ変わりであり、その祖母もまた、さらに昔の祖母の生まれ変わりである、という具合に、限りなくさかのぼることができた。大河の水面に映る像が、絶えず流れにかき消されても、つねによみがえ

るように。バヤングメ自身、大河が運び去るこうした像のひとつであり、おそらくいつの日か、ひとりの少女を生み育てるのだろう。その少女もやはり魅力的で、同じ鼻、同じ目、風に震える同じ肩をして、腹部には苺の、いやむしろ青みがかった木苺のしるしが見られることだろう。そして神秘的に輝く大河の水に映し出されるさまざまな考えに触れようと、同じように身を屈めることだろう。ここまで気持ちが高まると、少女は心地よい眩暈にとらわれた。でも日によつては、この眩暈がもたらすかすかな痛みのせいで自問するのだった。なぜ祖母の声はけつして語りかけてこないのか。なぜバヤングメのか細い声音しか胸に響かないのか。生みの母は娘を安心させようと、臍へそのそばにまだ見えている跡を思い出させ、身振りや話し方、ちよつとした表情までも祖母バヤングウェにそっくりであると言った。母は微笑みながらつけ足した。くだらない問題にこだわって熱中していることも、間違いない、バヤングウェという女性の哀れな心に由来するのだ、と。故人の白い遺骨に安らかな眠りあれ。

するとやや当惑した少女は無言で立ち去り、村のはずれをさまよいながら、疑い深げに顔をしかめて自問するのだった。こんなに強く、はつきりと、かたくなに、自分がバヤングメだと感じるのにはなぜ？ 人々が暮らす大地に見おぼえないのはなぜ？ あらゆる瞬間が息をのむほど新鮮なのはなぜ？ 前世でこの世を生きたというのに、何も思い出せないのはなぜ？

生まれた日に、彼女は父の古い友人ディアデュの許嫁いひなすけとされた。若いころ、マオール山脈の方面で

ともに狩りをした思い出のためであった。過ぎ去りしその時代には、人間を狩るための罠が通り道に仕掛けられることはなかった。歴代の雨の王が選出されるエナムポールに住んでいたディアデュは、水の名にかけて、この厚意を受けるわけにはいかないと言い張った。少女の腰が成熟するころには、自分は老いぼれるか、くたばっているだろうから。しかしかつての狩猟仲間の気分を害しないために、甘んじて受け入れるほかなかった。男は死を望んだ。少女の腰が丸みを帯びる前に逝ってしまいたかった。なぜなら、言うまでもなく、生殖器の若さを誇るためにヴァリカラムの根を吸うような手合いではなかったからだ。でもこうした言葉は夜風にさらわれてしまい、バヤングメが第二のあだ名としてウティリ・バン・ウリンを与えられた時でも、男は依然として両脚で立っていた。この名は、河岸で用いられるディオラ語で、太っているが重さは動作をさまたげない、という意味であった。

ディアデュは、まだ子どもの婚約者が親族と住む敷地を訪れるたび、その幼い腕、肉づきのいい腰、上半身を覆う柔らかな肉塊の連なりを順に指でつまむのだった。ディアデュには贈り物をするだけの財力と技量があった。粘土の人形、マンガードで作ったヨーヨー、鈴、細いレモンの木を削ったこま、そして将来、女として迎える夜に身につける真珠のブレスレットとベルト。バヤングメはお辞儀をし、両手で表情を隠した顔を上げながら、秘めた喜びとともに贈り物を受け取った。もうじき夫となるこの男を、彼女はずっと前から婚約者と呼んでいた。自分を姪と呼ぶ男なら誰でもおじさんと呼ぶように。すべてを勘案した少女は、この世界における自分の立場はまんざらでもないと思っていた。

手足が伸びきっていなくても、名士と婚約しているこの娘に、大人たちはいくらかの仲間意識をもった。彼女は軽い眩暈をおぼえた。まるでエナムボール王の祭りの夜に、鳥の羽根をまといつてダンス用の竹馬に乗る時のように。それでも、いくつかの言葉によつてこの高みから突き落とされることもあった。例えば少年たちは、老いたディアデュは彼女を介して亡き祖母ポングウエと結ばれたいだけなのだと言いつらした。かつて二人は想いを寄せ合つたけれど、悲恋に終わったのだろう、と。でも老人は、少女の月経を待たずに死んでしまふに違ひない。二人は次に生まれ変わる機会をうかがいながら、地中で待つしかない……。ああ、ディアデュがうるわしのポングウエとついに結ばれるまでには、どれほどの歳月が流れることだろう？……毒舌家たちはそう言い立てた。だが奇妙なことに、こうした言葉はバヤングメの気をよくした。彼女は機嫌を損ねたふりをしつつも、人々の捉えどころのない序列における、自分のやや危うい地位に改めて満足するのだった。おそらく、本当に憂慮すべきはコモボの口だけだった。目立たない外見の少年で、耳は尖り、目は無邪気を装っていた。コモボは思春期の男の子たちのように下品な話をするとはなかったものの、その口から発せられると、ごく単純明快な言葉であつても極めてあいまいで、陰険で、不快に聞こえた。この世のどんなあだ名も、おそらくこの少年が考えたものほどバヤングメを深く傷つけはしなかった。二人の関係はごく幼いころにさかのぼる。少年は無造作に少女のほうに身を乗り出しては、いつも同じ、ザリガニという言葉で耳元でそつとささやく機会を逃さなかつた。彼はまた少女の前で、小刻みに飛び跳ねては急に横に動い

て、この小動物の歩みをまねるのを好んだ。葬儀や特別な儀式など、跳躍ができない時には、静かに両腕を頭上に掲げて、バラント地方に生息する青く小さいザリガニの触覚を表現するのだった。ある葬式では、コモボのやり口に大人たちも驚かされた。彼が考えついたのは、微動だにしない状態を誇示しつつ、目玉を途方もなく突き出して、ザリガニの頭部にある小さい赤玉さながらの丸い突起とすることだった。こういうわけで、コモボが前夜、家族の食卓で味わった魚の話をするだけで、すぐに少女は頬を赤らめた。ある時、耐えきれなくなった彼女は、突然、少年の顔に豚の異名である次の言葉を投げつけた。「クバギ・ク・ボン（ああ、塩漬けにされるべきおまえの肉）」しかし侮辱と感じるところか、コモボは優しい笑みを浮かべて、無邪気に目を輝かせた。そして彼が隠された意味を知っている、驚くべき皮肉のひとつを投げ返した。「カウォロン・カディアク」ただそれだけ。それは、外見が立派で食べてもおいしいワリ・ワリと呼ばれる鵜ばのもつともありふれた異名であった。彼は微笑んで、カウォロン・カディアクと答えるのだった。河岸のディオラの言葉で、おまえの尻の肉にアイモンドで味つけすると、なんと旨いことか、を意味する。

朝の仕事の時に、末無し川の岸辺でこんなことが起きた。同じ年の子どもが十人ほど、長くて平たい石に膝をついて、夜気に冷やされた緑の水の上澄みを探しては、木の葉を沈めてすくい、土を焼いて作った壺へと、肩の上から勢いよく注ぎ込んでいた。コモボの言葉が軽快に宙に舞い上がると、甲高い笑いが鵜の鳴き声のようにわき起こった。バヤングメは壺を頭に乘せて、重い足取りで住居の囲

い地向かった。数日間そこに閉じこもり、口をつぐんで、人間の大地で起こりえる、あらゆることを夢見ていた。少年の多くがママシに噛まれてヤシの梢から落ちたかと思えば、他の子たちは生きたままやせ細って干からびたり、腹部が革袋のようにふくれ上がったりした。森で道に迷い、どういうわけか消えてしまった少年たちもいた。シジィティオールの白い霊に売られたのかもしれない。――ではなぜ、コモボには何も起きないのか……？

ある日、コモボの腹がふくらむと、少女は自分の罪深さに気づいた。そのことを知るなり彼女の第一の母は、すべての女性たちに、翌日、村はずれの小屋に集まるよう呼びかけた。それは一族の告解場である。しきたり通り、彼女は集会の目的については誰にも知らせていなかった。自分たちの性の秘め事を守るため、集会の新顔たちは小屋の周りを厳重に監視した。監視は周辺の木立の茂みにも及んだ。女たちが室内に集まり、年齢、影響力、土地の精霊との結びつきを勘案して順に腰を下ろすと、バヤングメの第一の母は娘を輪の中央に押し出し、こう呼びかけた。「言うべきことを言いなさい。そして建物を支えるのは言葉であることを思い出しなさい」

バヤングメは告解者用の細くて白い布を額に巻いて、両手を開いて両肩に置き、目を伏せて、恐怖にやつれた顔をしていた。女たちの輪の中央にまっすぐ立つと、自分の心を支配した悪意のことを告

白した。なぜ人の死を願ったのかと問われると、彼女は困り果てて哀れな口を開いたが、黙ってしまつた。いまや身を震わせて、窒息した魚のように舌を動かしていた。コモボの第一の母が発言を求め、皆と同じ質問を泣きながら繰り返した。少女は依然として輪の中央で言葉を失い、ゆつくりと周囲を見渡すその目は途方にくれ、絶望的な予感に満たされていた。二人の女性祭司が歩み寄り、少女が真剣に答えを探していることを認めると、女性が告解する際の伝統的なボエキンの歌を歌い出した。それぞれが、特別な才能を示そうとでもいうように、相手より高い声を出そうとしたため、二人の声は調和しなかつた。それでも、ふくろうを思わせる見開いた目を輝かせて、祭司たちはいまや命令するような口調で叫んでいた。「エラナ、エラナ。あなた様は最初の人間であられた。あなた様はわれらに大地と水を与えんと、手足を切り裂き血を流された。この娘の心を照らしたまえ。この心を。エラナ……」

突然ボエキンの霊に取りつかれたバヤングメは首から踵まで震わせて、自分の罪を認めた女たちがするように、ゆつくりと旋回するダンスの動きをした。唇から細い泡を流した少女は、まさしくボエキンの鼻にかかったか細い声で無意識につぶやいた。「なぜならあの子が私を喜ばせてくれないから。ああ、少しも喜ばせてくれない……」

この言葉が聞こえるなり会衆はため息をもらした。偉い婆さまたは微笑んで目配せし合い、驚いたように脂っこい睫毛をまたたいた……。